

# むかしむかし 昔々の そお市

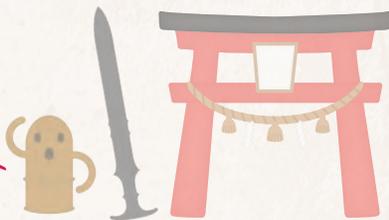
郷土を知る

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958

第9回

荒神免古墳

古代の不思議なお墓



**末**

吉町南之郷富田と坂元の台地に広がる畑地帯に、土を盛り上げて作られた塚状の遺跡があります。

荒神免古墳と呼ばれていますが、古墳時代に作られた畿内型高塚古墳ではなく、古い時代のお墓という意味で古墳と呼ばれています（墳は土を盛り上げて作ったお墓という意味があります）。

末吉郷土史には古墳近くを開墾していた時に遺物が多く出土し、その中の1つに、焼けた人骨が納められている壺が見つかったと記録があります。壺は高さ26cm、胴回り80cm、表面には布目状の跡が見られ、ロク口を使った丁寧なつくりであったとのこと。

出土した壺は須恵器を利用した蔵骨器（骨蔵器）と呼ばれるもので、壺の形態から平安時代ごろのものと考えられます。

日本には仏教の伝来と共に天武天皇4年（西暦700年）に道昭という僧が火葬の風習を伝えますが貴人や僧が対象でした。南之郷では屋敷寺から1点、古代の井手

ノ上遺跡近くから1点、蔵骨器が出土しています。

鹿兒島県内での蔵骨器の出土は64件にのぼり、曾於市内では末吉町3件、財部町2件、大隅町2件の計7件となっています。発掘調査での出土よりも畑の開墾や道路工事などで偶発的に出土する事例が多く、蔵骨器のフタに軽石を使用していたり、土師器のお碗をフタにしていたり、人や馬を横した土製品、金属製品とともに出土する場合もあります。

荒神免古墳自体の本格的な発掘調査は行っておらず、蔵骨器に収められた人物の由来などは不明な点ばかりです。今後の研究に大きな期待が寄せられます。



荒神免古墳出土の蔵骨器  
(末吉郷土史より)

